



録附號一十百三第聞新とほや 日六十月十年廿治明 可認省信遞

近世人物誌

やまと新聞附録

江川太郎左門
江川太郎左門、豆州藩の代官幕末屈指の名士なり平生深く水戸烈公の知遇を受けし文筆道の達人なり何事の問も郷音の聲應ずるが如く答へせし公如何の才にして其當惑の様をうけて興せんやめるとある時太郎左門伺候せし其許は何藝事も渉りて世知らずとのいふを定て音楽より達しつらん何れあれ奏する聴せしもの中お佛心得ざる有る答(申せし)推返しつるを謙遜かん必定心得んとの手やと太郎左門かこちにて是と習ひたるのいふを其やんか幼祖母の手元を養育し折祖母が手おさとの琴をいばらう開覽て再柱の曲敷止せしをばいばらうと申す供のいふを承りてすすれ面白し望せん琴もとの仰き侍候と持出せしるの前の羞直に道に暗くは斯武主の音楽何の曲あるか怒りぬ申す由かこち申出ておまぬ不束のいふを承りておまぬを握りてわ太郎左門後容く琴に向ひ顔てせりと櫻鳴せし音實行を止方深の壁を動かしてりては道に堪能の者とも此ははとんて一坐の者なりは烈公の深感ありしを倭にまじり物語あり



發行所東京
尾張町千番地
やまと新聞社
特筆兼
編輯人
中泉政太郎



活園工部

